
こんな魔王と勇者ってどうですか？

ケセランパセラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんな魔王と勇者ってどうですか？

【Nコード】

N2699X

【作者名】

ケセラランパセラ

【あらすじ】

俺、佐藤勇治さとうゆうじは平和な田舎町で暮らしていた平凡な高校生だった。けどあることがきっかけで異世界に飛ばされてしまいいきなり勇者になってしまった。そこで魔王退治を依頼される。しかたなくその依頼を受けて魔王退治に向かうがその魔王がかなりの変わり者だったんです。

俺、異世界に来ちゃいました(前書き)

はじめまして。ケセランパセランと申します。ファンタジーが書いてみたくて書いてみましたが！絶対グダグダになってきますのでそれともいいよという方はよろしくお願いします。！

俺、異世界に来ちゃいました

ここは日本のとある田舎町。あるものは見渡す限りの畑と田んぼ。町の周りも山に囲まれており自然があふれているとても空気のおいしい場所だ。これだけ聞けばとてもいい場所のように思うだろう。しかしさつきも言ったとおりここにあるのは見渡す限りの畑と田んぼそして山。そんな環境に俺は最近不満を感じるようになっていた。「本当なんにもねえよなこっつて」

そんな独り言を言いながら俺「佐藤 勇治」（さとう ゆうじ）は高校の図書室でただいま居残り作業中。

「はあ、あ、ついてねえよな」

よりもよって一番怖いと評判の教師の授業で居眠りしてしまうなんて。おかげで図書室の書庫の整理なんてやりたくもない仕事を任されてしまった。

「にしてもいったいいつになったら終わるんだこれ」

俺の目の前には気の遠くなる程の本の山。その中にはいつの時代の本だよと思うようなものもいくつか混ざっている。っていうかうちの高校の図書室ってこんなに本があつたのか。普段来たことがないから全然知らなかった。

けれどもここそんなに利用者がいないのか先ほどから人っ子一人来ない。本読みに来る人がいないのにこれだけ本あつてもあんまり意味がない気がするが。

そんなこと考えつつしばらく作業していると

「ん？・・・なんだこの本？」

たくさんある本の中の山の中でそれはひときわ怪しい異臭を放っていた。他の本と比べて見た目がかなりごつくこの本で思いつき殴られれば死ぬんじゃないかと思うほど分厚い。表紙にはどこの国の文字か分からないがひたすら一面になにか書いてある。なんていうかよくファンタジー映画なんかにてくる冒険の書みたいな感じの本だっ

た。

「うわぁー何かこれハリー ッターとかにでてきそうだな」

ちよつと興味を持ったので読んでみようと思ひ表紙をめくろうとしてみたが

「うおっ！なんだこれ重っ！！」

すごく重いぞこの表紙。表紙なのにこの重さつて読ませる気ないだろ。

「ぐぬぬぬぬ・・・こんぬおおおおおおお！！」

表紙をめくろうと格闘すること数分。なんとかめくることに成功したがかなり疲れた。

「ぜえはあぜえはあ・・・い、一体何の本なんだ？」

息をきらしながら本を見てみると

「なんだこれ？なんて書いてあるんだ？」

ページ一面にまたもやどこの国のものか分からない文字がびっしり書かれている。それとどこかで見ることがあるようなこれは魔法陣つていうのか？が書かれていた。

「これ何なんだろう？」

俺はその魔法陣？のようなものに手を触れてみた。その時だった

「あれ？なんか急に眠くなってきた・・・」

頭がクラクラする。なんだか体も軽くなってきた気がする。

「あゝ・・・どうなっ・・・てん・・・zzzzz」

俺はそのまま本の上に突っ伏すような感じで倒れこんだ。なにやら本が一瞬光っていたような気もするがそんなこと考える前に俺の意識は完全にブラックアウトしていった。

それからどれくらいたったのだろうか。

「・・・さま。」

ん？なんだ？なんだか体がゆさゆさと揺さぶられているような感覚が急に襲ってきた。

「・・・者様」

それに誰かの声も聞こえてきた。誰だ？せっかく人が気持ちよく寝

てたのに。

「う・・・ん」

闇の中に消えていった意識が次第に戻ってきた。俺はゆっくりと目を開けて上半身だけを起き上がらせる。

あゝまだ起きたばかりなので頭がボクボクとする。しばらくその体勢のまま下を向いていた。すると次第に頭がスッキリしてきた。

「どれくらい寝ちまつてたんだる俺」

よっと立ち上がって周りを見回す。そこで俺は違和感を感じた。

「あれ？」

図書室ってこんなに広かったっけ？天井とか見上げるくらい高かったっけ？こんなに綺麗な絨毯とか敷いてあったっけ？

「寝ぼけてるのか？」

そう思っただけ目をゴシゴシとこする。ついでにほつぺたもつねってみた。痛い。どうやら夢ではないらしい。意識もはっきりしているし見間違えることはないだろう。

「ど、どうなってるんだ一体」

何が起きたのかさっぱり分からない。ここはどこだ？そんなこと考えてたら

「勇者様！！お目覚めになりましたか！」

「ぬお！！」

急に後ろから声をかけられた。振り返るとそこにはマンガとかでよく見るようなお姫様みたいなカツコウをした女の子が立っていた。

「も、申し訳ありません。驚かすつもりはなかったのですが」

「あ、あゝいえ大丈夫です。はい。」

えゝと、誰だこの子。

「けれど、本当に勇者様が来てくださるとは。やはりこの書に書いてあることは本当だったのをごさいますね」

ん？ちよつと待て。この女の子今なんて言った。確か勇者？とか言っただけだったか。

「あ、あのゝすいません。さっきから言ってるその勇者ってなんで

すか？あとここはどこなんでしょうか？」

「ここですか？ここはセシリエル王国でございます。そして私がこの国を救ってくださいる勇者様をお呼び出しする儀式を行ったところあなた様がこの国に呼び出されたのです。つまりあなたがこの国の救世主である勇者様ということなのです！」

・・・なるほどつまり俺はこのなんとら王国を救う勇者様としての国に呼び出されたというわけか。

あるあ（ryねーーーーーーーーーーーーーーーーよ！！！！

「はあああああああああああああああああああああああああ！

！！！！！」

こうして俺の勇者様としての生活が始まったのである。

「え！？始まっちゃうの！！ちよっと~~~~~~~~！！！！」

一般人が魔王を倒すとか無理だと思うんだ(前書き)

お、お久しぶりで・・・ぐはっっ!!

というわけで久しぶりに更新です。よろしくおねがいし・・・バタッ。

一般人が魔王を倒すとか無理だと思っただ

えーと、待ってくれ。もう何から突っ込んだらいいのやら。図書室で書庫の整理をしていた俺がいきなりわけのわからない場所に来て目が覚めたら見知らぬ女の子に、'勇者様！'なんて呼ばれたりして一体どうなってるんだ。

「ちょ、ちよつと待って、待ってください。何なんですか救世主？この国を救う？何のことですか！？」

「ですからあなた様はこの書物によつてこの国に召喚された勇者でありこの国の救世主なのです！」

あくだめだ全然話にならん。どうするかなあ……。ふと彼女の手元を見てみると俺が書庫の整理をしているときに見つけたあの怪しい本を持っていた。これがさつきから言ってる俺をここに呼び出した？書物つてやつか。あれ？でもその本かなり分厚くて重いはずなのだけこの子は何でこんなに軽々と持つてるんだ？そんなことを考えていると

「勇者様、とにかくすぐに魔王退治の準備をいたしましょう」

「へ？魔王・・・何だつて？」魔王？何それおいしいの？

「さあこちらです！」

そう言っていきなり手を握られた。女の子に手を握られたの生まれ始めて始めてかも。

「あ、あのちよつと待つ・・・ぬああああああああああああ
！！！」

え！？何この子すごい力なんですけど！！やばいよ俺の体が宙に浮いちゃってるもん！！

「タンマ！！タンマーーーー！！きいやああああああああ
あああああー！！」

しばらくの間長い廊下をこの状態で過ごした俺は目的地につく頃には口から魂が出たような状態になっていた。

「さあ着きましたよ勇者様」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あれ？勇者様？きゃあああああ！！勇者様——！！」
しばらくして

「・・・・・・・・はっ！！！」

俺は何とか意識を取り戻した。

「勇者様！よかったですー！。ごめんなさい私慌ててて・・本当に
ごめんなさい・・」

女の子は泣きそうになりながらペコペコしてきた。

「い、いやまあ大丈夫だから。そんな泣きそうな顔しないで、ね？
実際全然大丈夫じゃなかったけど。生まれて初めて本気で死ぬか
と思った・・」

「ぐすつ・・本当にごめんなさい。勇者様はお優しいんですね」

「い、いやあそんな優しいなんてことは・・」
「またもや生まれて初めて女の子に優しいなんて言われてしまった。
正面から言われるとすんげえ恥ずかしいな。」

と、ここで俺はあることに気づいた。

「そっぴや君名前は何て言うの？」

「あ！も、申し訳ございません！私の名前はカトレア・ヒューブリ
ックと申します」

カトレア・ヒューブリック？何かすごい名前だな。やっぱりここ日
本じゃないのかなあ。

「カトレア・ヒューブリックさんね。俺の名前は佐藤勇治っていい
ます」

とりあえず俺も軽い自己紹介をする。

「佐藤勇治様・・それが勇者様の本名なのですね。しっかりと覚えて
おきます！」

「あ、ああありがとう。それよりもカトレアさんいつたいここって・
」

俺の目の前には所々に綺麗な装飾が施されている金色の扉があった。

こういうのよく分からない俺でも見入ってしまうほどの壮大さだった。

「ここにはわが国が魔王を倒すために開発した様々な武器が保管してあります。今から勇者様には魔王討伐のための武器選びをしていただきます。」

「まただ。さつきから魔王だの討伐だのすごい話をしているが俺には何のことだかさっぱり分からない。」

「ま、待って俺が魔王を討伐？それってその魔王とやらと戦えってことだよな？」

「はい、そのとうりでございます」

「いや、あの俺ケンカもしたことないし力だってそんなにないから戦うとかそういうのは無理だと思うんだよね」

「いえ、勇者様ならきつと大丈夫です！この書にも召喚された勇者が必ずやわが国を救ってくれると書いてありますしそれにこの武器庫の中にある武器を使って挑めば問題はないはずですから！」

「いや色々と問題だらけだよ！！何なのその自信は！本人が無理だと言っててるのに！」

「とにかく見ていただければ大丈夫だと思えるはずですから！行きましょう勇者様」

とりあえずここで魔王討伐の武器とやらを選ぶことになったのだが

「選ぶだけ無駄だと思うけどなあ・・・」

こうして俺の武器選びが始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2699x/>

こんな魔王と勇者ってどうですか？

2011年11月9日01時06分発行